

錬金術と終末論　ドイツのパラケルスス主義者

パウル・リンクとその救済史観

村瀬 天出夫

築田 航 訳

一 パラケルススとパラケルスス主義の改革運動

科学史および教会史上、激しく揺れ動いたルネサンス期に関して、本研究¹⁾は一六世紀後半に起源を有するいわゆるパラケルスス主義 (Paracelsismus/Paracelsian Movement)²⁾ というドイツ語話者による改革運動を対象としています。自然科学と宗教という二つの領域が交差するこの学際的運動の事例研究として、世紀転換期(一六〇一―一七世紀)に活躍した医学的人文主義者にしてパラケルスス主義者であったツァイツのパウル・リンク (Paul Link) の歴史哲学的著作を検討します。それによって、

リンクの思想世界においては、化学の前形態としての錬金術にかんする自然科学的(ないし自然哲学的)な思想と、宗教的な終末思想とが相互に結びついていることを明らかにします。

しかしながらリンクの錬金術的な終末論について仔細に取り上げる前に、まずは上述の改革運動の主要人物、スイス生まれの医師にして自然哲学者であったテオフラストウス・ボムバスト・フォン・ホーヘンハイム、すなわちパラケルスス (Theophrastus Bombast von Hohenheim, genannt Paracelsus, 1493/94-1541) に触れておくべきで

しよう³⁾。それは以下において、パラケルスス主義者と呼ばれる彼の支持者たちの登場と、パラケルスス受容史における彼らの影響を検討するためです。

科学史的には、パラケルススの影響は二つの観点から観察されるべきです。まず一つは、ルネサンス医学史の観点であり、そこには化学を医学へ導入しようとする改革の努力がありました⁴⁾。とりわけ有機的な薬物 (*materia medica*) に基礎を置きたいわゆるガレノス主義における従来の薬学との対立において、パラケルススとその支持者たちは無機的な、すなわち鉱物や金属に由来する薬の導入を主張しました。これは、錬金術・化学に基づいた調薬が新たな医薬学的手法として打ち立てられ、最終的に一七世紀には近代化学 (医化学) を確立することへ繋がります。次に、初期近代の化学史との関連も考慮されなければなりません。ここでは、従来の物質理論の見直しを求めるパラケルススの主張は、後に近代における粒子理論の発展へ繋がることとなりました (例えば、一七世紀後半の原子論のように)⁵⁾。四元素説 (火、空気、水、土) に基礎を置くスコラ哲学のアリストテレス主義の物質理論に対して、パラケルススと彼の支持者たちは錬金術に基づいた説、いわゆる「三原質説」 (*tria prima*: 硫黄、水銀および塩の三つを物質の始源的な原理とした) を提唱しました。それに

より古代と中世の自然哲学を修正しつつ、同時にその権威 (とりわけアリストテレス) を相対化しようとしたのです。したがって近代化学の発展の流れにおいてパラケルスス主義は、経験主義的な自然研究、すなわち観察と実験に基づき自然世界を化学的に読み解こうとする自然研究を求めました。

その科学史における影響について今日の—前述のような—ポジティブな評価と認識とは対照的に、パラケルススは存命中ほとんど注目されませんでした。フェラーラで医学博士号を取得した後、パラケルススは一五二七年にはパゼルで市医の職を得て、同地の大学で教鞭を執りました。しかしながらこの常に攻撃的な医師は同地の医学に携わる同僚たちとの対立により一年足らずで都市を去らなければなりませんでした。博士号を有する医師に相応しい公的な地位を獲得しようとする彼の試みは挫折したのです。彼の莫大で、大部分がドイツ語で記された医学的、自然哲学的、神学的な内容の著作のうち彼が刊行できたのはごく僅かでした。というのも彼は長年にわたる努力にもかかわらず自著を刊行してくれる出版者を見つけないことができなかったからです。彼が一五四一年にザルツブルクで亡くなった時、彼は数多くの未刊行著作を手稿の形で残しました⁶⁾。

その後二〇年間経ってようやく新たな受容が始まりました。多くの医学的人文主義者たちが彼の残した手稿を手に入れ、それらを公刊しようと努力したのです。こうした出版運動は一六世紀の転換期にその頂点を迎えました。パラケルススによる医学―自然哲学の著作はケルン選定侯エルンスト・フォン・バイエルン (Ernst von Bayern, 1554-1612) の求めに応じて一〇巻本の全集が四折判で公刊されました (バーゼル、一五八九/九一年)。その後まもなく彼の外科的著作の全集も二折判で公刊されました (ストラスプール、一六〇五年)。

彼直筆の著作は既に全て失われているという今日における残存状況を見れば、強調すべきは現代のパラケルスス研究が常に、当時の医学的人文主義を身につけたパラケルスス主義者たちによる編集文献学的な努力の恩恵を受けていることでしょう。それは散在するパラケルススの原稿を収集し、更に写字し、編集し、公刊する努力です。これらパラケルスス主義者らの「出版攻勢」の中で、教養ある医学的人文主義者たちはまた同時に彼ら自身が執筆した著作でもってパラケルススの医学及び自然哲学的思想を守り広めようとしていました。それは医学及び自然科学における彼らの改革運動を促進するためであり、その運動は、下記に見るように、宗教および終末論的な色彩を帯びていました。

二 パウル・リンク

こうした人文主義的なパラケルスス主義者の中でもツァイツのパウル・リンクが特筆されるべきです。彼は先述した一五八九/九一年の全集の共編者でもありました。遅くとも一五八四年以来、リンクは、医師であり全集の編者であったヨハン・フーザー (Johann Huser, c.1545-c.1600) の下で、当時ノイブルク (アン・デア・ドナウ)、バーゼルのベルンに保管されていたパラケルススの手稿を収集することとで、フーザーの編集活動を手助けしていました。「医学及び哲学の学徒」 (*studiosus medicinae et philosophiae*) として知られたリンクは遅くとも一五九九年以降「医学会詩人でもあった彼は全集刊行にあたって、「パラケルスス讃歌」 (*Candida*, 1589) と全集のパトロンである「ヘルンスト・フォン・バイエルンに捧げる詩」 (*Carmen heroicum encomiasticum*, 1588) を執筆しています。主著としては歴史神学的著作の『三時代について』 (*Rechter Bericht von den dreyen Zeitaltern*, 1599 [成立] / 1602 [加筆]) が手稿の形でのみ伝わっています。四部からなるこの著作は救済史を叙述しており、いわゆるヨアキム主義の三時代説に立脚しています。第一部はリンクの

歴史認識についての概観となっており、それによれば地上の歴史は三位一体説に基づいて三つの時代に区分されま
す。リンクによれば第一の時代(父なる神の時代)は古き「旧約聖書の時代」とされています。そしてイエス・キリストの誕生をもって第二の時代(神の息子による第二の時代)が始まったとされます。この第二の時代の終わりに生きていると信じるリンクは、至福の未来、つまり三番目となる最後の「聖霊の時代」の到来を待ち望みます。¹⁸⁾

第二部でリンクは彼が生きている時代を聖書主義的に解釈します。つまり、彼は―過去を年代順に記述するのと並んで―聖書の典拠に基づいた歴史解釈を試みます。とりわけ共観福音書の終末論(マタイ二四)がリンクの解釈上の準拠枠となります。彼によれば、福音書において既に予期されていた「終末の徴」がいまや相次いで現れている。つまり、一六世紀末における宗教上・教会上の動揺は、¹⁹⁾聖書の終末の預言が実現しつつあることを示しているとリンクは考えます。²⁰⁾

しかしながらリンクによれば、今や頻繁に確認される終末の徴は、歴史全体の終焉を指し示すものではありません。むしろそれらは当時の「第二の時代」の終わりを知らしめるものであり、それをもって至福なる「第三の時代」が間もなく訪れることを伝えるものとリンクは考えます。こ

したよりよい未来への千年王国的(chilistisch)な望みに基づきリンクは―続く第三部において―引き続き最後の時代に起こることとなる将来の出来事を叙述し、最終的に第三の時代の終わりに生じる世界の没落についての彼の解説を続けます。

最後の第四部は彼の終末論の典拠を集めたものです。リンクは先行する三部においては聖書記事や三時代説のような歴史神学的な図式を解釈の道具として用いているのに対して、第四部では歴史上の人物を権威として引き合いに出します。つまり彼の議論を正当化するために多くの中世ないし同時代の神秘主義者―例えばヒルデガルド・フォン・ビンゲン(Hildegard von Bingen, 1098-1179)やブリギッタ・フォン・スウェーデン(Brigitta von Schweden, 1303-1373)・ヨハネス・タウラー(Johannes Tauler, c.1300-1361)・ヨハネス・トリテミウス(Johannes Trithemius, 1462-1516)あるいはセバステイアン・フランク(Sebastian Franck, 1499-1543)―を彼の終末論の証人として引いています。そして、これらの「宗教的叙述家と預言者たち」の一人としてパラケルススも数え入れられることとなります。²¹⁾

パラケルススの後世の影響との関連においてリンクの著作は受容史的に次の二つの観点から重要です。一つ目は、

リンクが著書の第四部においてパラケルススの神学的な著作を引用している点に求められます²⁴⁾。パラケルススの神学的著作は当時ごく僅かな例外を除いて未刊行であり、それらの編集は二〇世紀になって初めて始まったものです（現在も未完²⁵⁾）。パラケルススの神学的著作の受容史において、文書の所有者が同定されるのはたいへん稀なことです。リンクによるパラケルススのテクスト引用が示すのは、リンクこそ初期近代におけるパラケルススの神学的著作の所有者かつ管理者の一人だったという事実です²⁶⁾。

二つ目は、リンクの著作内で示された新たなパラケルス像と関わります。つまりリンクにおいてパラケルススは宗教上の権威です。一五六〇年代と一五七〇年代のパラケルスス主義者第一世代とは異なり、リンクにとってパラケルススはもはや単なる新医学の創始者ないし権威ではなく、「終末の予告者」（「預言者」（Prophet））でした。このようにパラケルススが医学的な権威から宗教的なそれへと変容し様式化される例は、パラケルスス主義運動が一六世紀の末から宗教的な色彩を帯び始めつつあったことを示しているのです²⁷⁾。

こうした「宗教的パラケルスス主義」の潮流を明確にして当時の社会的文脈に位置付けるために、以下ではリンクの終末論へと―彼の千年王国的かつ自然神学的思想を例

に―より仔細に迫ることとします。

三 迫る終末への期待

リンクの終末論を明らかにするためには、「第三の時代」についての彼の記述により一層注意すべきでしょう。リンクはこれをパラケルススに即して「黄金時代」（*caerum seculum*）とも呼んでいます²⁸⁾。学問的および靈的に進歩した時代と見なされる、この来る終末の時代こそ、リンクの千年王国的な、迫る終末への期待（*Naherwartung*）を基礎づけるものです。

当時の宗教―政治的不和を目の当たりにして、リンクは来る時代へ平和の期待をかけました。彼によれば、そこでは「平和と団結と平穩」（*Friede, Einigkeit vnd Stille*）のみが全地を覆い、「黄金時代においては死をもたらず武器は役に立たず」、それゆえ「無用」とされる²⁹⁾。彼の平和主義思想はここでは教会および聖職者に対する反宗派主義的な批判に基づいています。それによれば、過去「七〇年ないし八〇年」続いてきた戦乱は、とりわけ宗教的な混乱に、つまり論争神学に陥る宗派教会間の対立と不和（「坊主どもの諍へ」（*Paffen Kriege*））に根を張るものとされます³⁰⁾。

分裂によって特徴づけられる当時のキリスト教世界に不満を募らせるリンクは、最後の審判の日を前にキリストが「地上に彼の霊的な王国を」打ち建てるといふ千年王国的な希望を抱きます（「精緻な千年王国論」(Chiliasmus subtilis)³¹）。リンクによれば、そこにおいて教会分裂が終結し、それとともに、あらゆる宗派が「ただ一人の羊飼ひ」（キリスト）の下で一つになる。すなわち、来る最後の時代には、

あらゆる宗派と宗旨はただ一つの信仰の下にある。「…」ただ平和と安寧だけがあり、人々はもはや互いに争うことはなく、いがみ合うこともない。「…」すなわち、サタンでも異端者でも世俗の暴君でもなく、キリストが支配を一手に握るのである。³²

千年王国論に彩られたリンクの融和神学はまた彼の終末論的—楽観主義的な確信とも結びついています。パラケルススの錬金術的・化学的な医学論が当時の出版市場を席卷するのを目の当たりにするリンクは、パラケルススの医学が（従来のガレノス主義大学医学に対して）最終的な勝利を収めるといふ確信を露わにします。リンクによれば、

黄金時代にはキリストとキリスト教信仰の全てについて正しい理解が知れ渡るだけでなく、自然の秘薬 (Arcana) と医学の神秘 (Mysteria Medicinæ) とが、今より一層、知られることになるであろう。³³

受容史的に見て指摘されるべきは、融和神学的かつ科学主義的に基礎づけられたリンクの千年王国論はまたパラケルススの終末論にも基づいていたということです。パラケルススは、これまで知られずに残っていた学知が終末の時に暴かれ明らかになると信じていました。それゆえリンクはここで「黄金時代における学芸の暴露 (Offenbarung)」の証人としてパラケルススを引き合いに出したわけです。³⁴

四 彼岸

リンクの終末論は彼の自然神学によっても特徴づけられています。自然探求から得られる知見は聖書の記述と矛盾するものではなく、両者は互いに調和しうる（知識と信仰の一致）という彼の自然神学的信念に基づき、リンクはパラケルススの錬金術概念を援用して終末の出来事 (eschaton) を解釈しようと試みます。

その際とりわけ重要となるのは「第三の時代」の終わり

鍊金術と終末論 ドイツのパラケルスス主義者パウル・リンクとその救済史観（村瀬）

に起こるとされる最終的な世界の没落（Weltuntergang）の解釈です。彼の一連の聖書釈義（ペトロの手紙二三、一〇—一三）においてリンクは来る「聖霊の時代」は「終末の日の火による全世界の崩壊と共にその終わりを迎える」と説いています。それは「新たな天と地の創造」へと続く「古き創造」の終結とされます。リンクの終末思想によれば、「時代の完結」（consummatio seculi）は鍊金術的な世界の燃焼過程として理解されます。したがって「この世の变成」（transitio hujus mundi）とは、

塩、水銀、硫黄という三つの始原的要素への溶解なし瓦解である。それら「三つ」は、神が諸物質を構成「創造」する際の材料となったものである。「…」それらへの分解、溶解、または解体は、「…」液化（liquefactione）によって起こるのである。^{②③}

ここでリンクはパラケルススの物質理論（三原質説）を引いています。それによればあらゆる自然界の物体は三つの基体「塩」「水銀」および「硫黄」から成り立っているとされます。パラケルススの鍊金術に基づいた世界観に依拠してリンクは、あらゆる被造物の溶解の結果、「永遠不可視の靈的存在」は「超自然的な「神の」火によって純化」

される、と説きます。このプロセスは、精錬と分離（不純物の除去）という鍊金術的な操作と比較可能とされます。すなわち、神が超自然的な火を用いて被造物を純化する終末のプロセスは、鍊金術師が「自然的な火」を用いて「純金」（purum putum aurum）を得ようとする作業場のプロセスに対応するというわけです。^{②④}

こうした終末の頂点における精製過程は「聖書と自然の光「自然研究」」に基づいて証明されるとされます。すなわちリンクは、自然界から得られる知識に基づいて人は、人類と世界の救済など神学的な問いにも取り組むことができるという、自然神学的な解釈論の立場にあります。したがって彼はこう主張します。「すなわち人は、自然の事物すなわち被造物の知識を通じて、神の超自然的な御業を認識することができる。」^①ここでリンクは鍊金術思想に彩られた自然神学の主導者として現れています。神の救済の業は、「变成の術「鍊金術」」によって「…」正しくまた信心深く観想」し「説明する」ことができるのだと、彼は主張しているのです。リンクによれば、鍊金術による物質変成のプロセスは、終末における世界の浄化というプロセスを例示的に先取りしている。彼の物理神学的（physikotheologisch）な考えによれば、神によって天地創造が為された始原の時より、自然「被造物」の世界には「終

末の出来事」の「範型」(Vorbilder)が組み込まれている(「自然的な、可視的な事物を通じて予め示されている」)。したがってリンクの終末にまつわる思索は、次のような創造神学(Schöpfungstheologie)に基づいています。すなわち神は、天地創造における自らの神意に基づいて人間に利用するあらゆるものを被造物(自然界)に植えた、とする立場です。

錬金術(*ars alchemica*)のプロセスに終末の出来事の寓意(*allegoria*)を見出しうるという主張は、宗教改革者ルターにも見られるように、この時代には決して特異なものではありません。それでもなお、リンクの終末論は以下の観点から注目値するでしょう。宗派主義的な教会組織に対する疑念に特徴づけられる彼の著作は、当時のキリスト教会における信仰分裂への応答である、という点です。再三にわたって彼は、人は自然認識に基づいて神認識へ至るといふ自然神学的な主張を繰り返します。こうした主張は同時に終末論によっても特徴づけられています。すなわち、終末の時間における「学問」(*Wissenschaft*)の進歩は「信仰」(*Religion*)の更生へと繋がる。それゆえ、分裂した現在のキリスト教会も来る「第三の時代」において最終的な一致(*Unität*)へと至る。このようにリンクは確信しているのです。こうした「より良き時代」(*bessere Zeiten*)

への千年王国的—ユートピア的な憧憬に、「心靈主義的宗教哲学者」(*spiritualistische Religionsphilosoph*)と呼ばれるパウ・リンクの救済史観は基づいていたのです。

五 展望

宗派教会の成立(「宗派化の時代」)によって特徴づけられるドイツ語圏のルネサンス末期に該当するこの時代において、リンクの著作は反宗派主義的かつ非妥協的(*nonkonformistisch*)な敬虔の例として見られるべきでしょう。こうした非正統的宗教性は外科医パラケルススで神秘的神学者として捉え、終末論的な自然神学の権威として見なすこととなります。こうしたパラケルススの宗教的様式化が示唆するのは、一六世紀転換期におけるこの反宗派主義的色彩を帯びた「パラケルスス崇拜」(*Paracelsus-Kult*)が同時代の他のパラケルスス主義者たちにも共有されていたということです。すなわち続く三〇年戦争期(一六一八—一四八年)、「宗教的パラケルスス主義」の千年王国的自然神学は、その擁護者を新しいパラケルスス医学の支持者の中にも獲得し、また同時に正統プロテスタント教会においては厳しく断罪されることとなります。

続くバロック期におけるリンクの著作の受容を見れ

ば、彼の非妥協的宗教性は敬虔主義（Pietismus）の前段階に位置付けられるべきでしょう。信仰分裂の最終的な解消（*unum Ovile et unus Pastor*）^⑧に対するリンクの憧憬は、とりわけポスト宗教改革期の「敬虔の危機」（*Frömmigkeitskrise*）の流れに置かれるべきです。この潮流はプロテスタント内部の反体制的な勢力において一六世紀末以降、さらなる宗教改革への希求をもたらし、「真のキリスト教」を求める前—敬虔主義的（*vor-pietistisch*）な要求を引き起こすこととなります^⑨。

研究の欠如としてなお残っているのは、リンクの終末論と自然神学のより広範な受容路の解明と、同時に宗教的パラケルスス主義そのものの勃興と没落に関する調査です。それによってこの時代の学問と宗教との相互作用についてより広い理解が期待されることでしょう。

註

- (1) 現行の研究は大部分を筆者が二〇一三年に提出した博士論文に拠る。Amadeo Murase, *Paracelsismus und Chitanus im deutschsprachigen Raum um 1600*, Diss., Heidelberg, 2013, vor allem Kap. 3.6 und 4. 本研究は日本学術振興会科学研究費(課題番号16K21332)による研究助成を得た。
- (2) 同時期のムラケルヌス主義については Wilhelm Kühlmann and Joachim Telle (eds.), *Corpus Paracelsisticum. Dokumente frühneuzeitlicher Naturphilosophie in Deutschland. Der Frühparacelsismus*, 3Bde., Tübingen bzw. Berlin, 2001/2013 (im Folgenden: CP1-3). 科学史'宗教史関連'の二つは Joachim Telle (ed.), *Analecta Paracelsica. Studien zum Nachleben Theophrastus von Hohenheims im deutschen Kulturgebiet der frühen Neuzeit*, Stuttgart, 1994; Ole Peter Grell (ed.), *Paracelsus. The Man and His Reputation*, Leiden et al., 1998.
- (3) ムラケルヌスの生涯については Udo Benzenhöfer, *Paracelsus, Reinbeck*, 2003; 1997. 更に以下を参照。Walter Pagel, *Paracelsus. An Introduction to Philosophical Medicine in the Era of the Renaissance*, Basel et al., 1982; 1958; and Charles Webster, *Paracelsus. Medicine, Magic and Mission at the End of Time*, New Haven/London, 2008. ムラケルヌス主義の影響については以下を参照。"Paracelsus" in *Killy Literaturlexikon 2*, Bd. 9, 2010, pp. 83-90 (W. Kühlmann).
- (4) 医薬中の状況については Wolfgang U. Eckart, *Geschlechter*

- Medizin*, Heidelberg, 2005; 1990, pp. 98-101; Christoph Friedrich and Wolf-Dieter Müller Jahncke, *Geschichte der Pharmazie*, vol. 2: *Von der Frühen Neuzeit bis zur Gegenwart*, Eschborn, 2005, pp. 267-285.
- (5) 以下については Allen G. Debuss, *The Chemical Philosophy. Paracelsian Science and Medicine in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, 2 vols., New York, 1977, esp. vol. 1, pp. 45-61; Bruce T. Moran, *Distilling Knowledge. Alchemy, Chemistry and the Scientific Revolution*, Cambridge MA/London, 2005; William R. Newman, *Atoms and Alchemy. Chemistry and the Experimental Origins of the Scientific Revolution*, Chicago/London, 2006.
- (6) Paracelsus, *Sämtliche Werke*, 1. Abt.: Karl Sudhoff (ed.), *Medizinische, naturwissenschaftliche und philosophische Schriften*, vols. 1-14, München/Berlin, 1922/33.
- (7) 彼の神学に関する編纂事業は今なお未完成である。現在確認できるのは Paracelsus, *Sämtliche Werke 2. Abt.*: Karl Sudhoff and Wilhelm Matthießen (eds.), *Theologische und religionsphilosophische Schriften*, vol. 1, München, 1923; vols. 2-7, Kurt Goldammer (ed.), Wiesbaden, 1955/86. これら未完成の版と並んで、以下に新たな編纂プロジェクトを示す。Paracelsus, *Theologische Werke 1*. Urs Leo Gantenbein (ed.), *Vita Beata. Vom seligen Leben*, Berlin, 2008 (Neue Paracelsus-Edition, vol. 1). 以後、ムラケルヌスの神学的著作を引く際については、ローマンロー Goldammer 版を用いる。

錬金術と終末論 ムイツのパラケルスス主義者パウル・リンクとその救済史観(村瀬)

- (8) 下記註一一参照。
- (9) 以下の書誌学的記録を参照。Karl Sudhoff, *Versuch einer Kritik der Echtheit der Paracelsischen Schriften*, I. Theil: *Die unter Hohenheim's Namen erschienenen Druckschriften*, Berlin, 1894 (reprographischer Nachdruck Graz, 1958, unter dem Titel: *Bibliographia Paracelsica. Besprechung der unter Theophrast von Hohenheims Namen 1527-1893 erschienenen Druckschriften*), pp. 60-365.
- (10) Paracelsus, *Bücher und Schriften*, Johann Huser (ed.), Tl. 1-10, Basel: Konrad Waldkirch, 1589/91; ders., J. Huser (ed.), *Chirurgische Bücher und Schriften* [Tl. 11], Straßburg: Lazarus Zetzner, 1605. 以後「パラケルススの医学—自然哲学的著作を引く際にはフーザー版(Tl. 1-11)を用いる」(reprographischer Nachdruck, 6vols., Hildesheim, 1971/75).
- (11) 彼(白筆)の継承者としてオトツトツを参照。Karl Sudhoff, *Versuch einer Kritik der Echtheit der Paracelsischen Schriften. II. Theil: Paracelsische Handschriften*, Berlin, 1899, esp. pp. 1-12.
- (12) S. zusammenfassend CP1, pp. 18-20. Vgl. auch Lynn Thorndike, *A History of Magic and Experimental Science*, vol. 5, New York, 1941, pp. 617-652 (Paracelsian Revival).
- (13) リンクの生涯について正確な情報は僅かしか知られていない。以下を参照。Sudhoff, *Versuch*, Tl. II (wie o. Anm. 11), p. 7f.; and das Biogramm in: CP3, pp. 843-844. 以下
- (14) フーザーの報告を参照。Johann Huser, "Vorrede an den Leser" in Huser (ed.), *Paracelsus, Bücher und Schriften*, Tl. 1, p. B3r: "[...] meinen Amanuensem, PAVLYM LINCK, MEDICINAE STUDIOSUM, welches an seinem feiß nicht mangeln lassen/ vnd darumb seins Lob auch würdig ist". 初期パラケルスス主義の中心人物として選定候補ホルンステル・フォン・グインホルンの待医であったホルン・フーザーにこのことは以下を見よ。Joachim Telle, *Johann Huser in seinen Briefen. 17世紀のシロコシの伝説者パラケルスス主義のシロコシ* in ders. (ed.), *Parerga Paracelsica in Vergangenheit und Gegenwart*, Stuttgart, 1992, pp. 159-248; die Erläuterungen in: CP2, pp. 412-414; und das Biogramm in: CP 3, pp. 799-802.
- (15) オトツトツ。Robert-Henri Blaser, *Robert-Henri Blaser, Paracelsus in Basel*, hrsg. von der Schweizerischen Paracelsus-Gesellschaft, Muttenz/ Basel, 1979, pp. 145-187 (mit Faksimile und Übersetzungen aller Dichtungen Links); Joachim Telle (ed.), *Paracelsus im Gedicht*, Hürtenwald, 2008, pp. 52-58, 254-256 (Kommentierte Textproben).
- (16) Paul Linck, *Rechter Bericht Von den Dreyen Seculis und Judicis DIVINIS Post DILUVIUM [...]*, entstanden 1599, verneht und abgeschlossen 1602. その語彙についてはこの版が伝わる。Wolfenbüttel, HAB, Cod. 981 Helmst.; Staats- und Universitätsbibliothek Hamburg; Cod. theol. 1914; Rostock, UB, Ms. Theol. Fol. 72. 以下

は Wolfenbüteler 版の草稿を利用した。ページの参照は新たな丁付け(右丁)に拠る。著作については、以下を参照。 Carlos Gilly, *Cinemia Rhodostauronica*, Amsterdam, 1995, p. 20(Nr. 18).

(17) ヨアキム主義の三時代説については以下を見よ。 Marjorie Reeves, *The Influence of Prophecy in the Later Middle Ages. A Study in Joachimism*, Oxford, 1969, pp. 126-132 [「ページヨリ・リヴス」大橋喜之訳]『中世の預言とその影響 ヨアキム主義の研究』八坂書房、二〇〇六年〕。受容については以下を見よ。 Wilhelm Schmidt-Biggemann, *Philosophia perennis*, Frankfurt am Main, 1998, pp. 611-614; Siegfried Wollgast, *Philosophie in Deutschland 1550-1650*, 2. Aufl., 1993, pp. 332-334.

(18) Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 14r.

(19) リンクはルターによる改革以来の信仰分裂とそれに引き続く宗派教会間の論争神学的対立およびヨーロッパ全土での宗教戦争を指している。改革後の「危機の時代」(Zeitalter der Krisen) に関する概観については以下を見よ。 Heinz Schilling, *Aufbruch und Krise. Deutschland 1517-1648*, Berlin, 1988, Kap. 5(pp. 313-370) and 6(pp. 371-463); zusammenfassend Anne-Charlot Trepp, *Von der Glückseligkeit alles zu wissen. Die Erforschung der Natur als religiöse Praxis in der Frühen Neuzeit*, Frankfurt a. M./New York, 2009, pp. 26-33.

(20) リンクによれば一六〇〇年頃の信仰危機(Glaubenskrisis)は終末の徴の現れと見なわれていた。この主題に関して以下を見よ。 Matthias Pohlig, “Konfessionskulturelle

Deutungsmuster internationaler Konflikte um 1600”, *Archiv für Reformationsgeschichte*, 93(2002), pp. 278-316.

(21) パラケルススとその神学的著作においてマタイ福音書二四章における共観福音書の終末論に関する彼自身の解釈に従い最後の審判の日が間もなく到来することを否定している。以下を見よ。 Paracelsus, *De secretis secretorum theologiae*: “Und so die fromben vermeinen werden, ein solch krieg und blutvergießen und rumoren, es würde der jüngsttag da sein, [...] aber nit gedenkent drumh, dieweil es undter den verführen also gehet, daß darumb der jüngsttag sei, nein, es ist noch kein end der welt” (ed.), Goldammer, Bd. 3, p. 218). 以下を見よ。 Paracelsus, *De genealogia Christi*, (ed.), Goldammer, Bd. 3, S. 89f.

(22) Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 183r.

(23) 著書の第四部(第二章)においてリンクはパラケルススの著作から数多くの抜粋を収めている。当時既にフォーザーによる一〇巻本の全集(一五八九/九一)が存在していた医学-哲学的著作の他に、リンクはパラケルススの神学的著作二冊から引用している。Die “Auslegung über das 24. C: Mathh.” (Bl. 193r-v; vgl. die Heidelberg Handschrift, Pal. Germ 26, Bl. 165vff. [“Naturalium et harum rerum similitum Interpretationes super Quatuor Euangelistas”]) und die – erst im vergangenen Jahrhundert (ed.) Goldammer, Bde. 4-7) gedruckt erschienene – “Auslegung der Psalmen” (Bl. 193v-199v).

(24) 上記註七を見よ。

錬金術と終末論 ドイツのパラケルスス主義者パウル・リンクとその救済史観（村瀬）

- (25) これについては、パラケルススの神学の継承—受容史に関するウルス・フォン・ガンテンベイン（Urs Leo Gantenbein）の手による概略的な見取り図を参照。Paracelsus, *Theologische Werke*, (ed.) Gantenbein（上記註七参照）pp. 37-40.
- (26) これについては基礎的文獻として以下を見よ。Carlos Gilly, *Theophrastia Sancta. Der Paracelsismus als Religion im Streit mit den offziellen Kirchen*, in *Analecta Paracelsica*（上記註二）, pp. 425-487.
- (27) 例えは、以下を見よ。Paracelsus, *Von den natürlichen Dingen*: “Aber jetzt ist die Zeit also/ das man der Hurexy achtet/ so lang/ biß der dritt theil der Welt erschlagen wird/ vnd der ander am Schelmen stirbt/ vnd der dritt kaum verbleibt: [...] Als dann ist die Guldin Welt/ das ist/ als dann wirdt der Mensch in sein rechten Verstandt kommen/ vnd Menschlich leben/ nicht Viehschl/ nicht Sewisch/ nicht inder Speluncken” (ed.) Huser, Tl. 7, p. 200: Vgl. Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 188r; Apoc. 8,7). パラケルススの千年王国論にこころは以下を見よ。Kurt Goldammer, *Paracelsus in neuen Horizonten. Gesammelte Aufsätze*, Wien, 1986, pp. 125-143; Siegfried Wollgast, “Zur Wirkungsgeschichte des Paracelsus im 16. und 17. Jahrhundert,” in Peter Dilg and Hartmut Rudolph (eds.), *Resultate und Desiderate der Paracelsus-Forschung*, Stuttgart, 1993, pp. 113-144, esp. pp. 114-121; and Murase, *Paracelsismus und Chiasmus*（上記註一）, chap. 1.2 (“War Paracelsus ein Chilast?”).
- (28) Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 139r.
- (29) ヴビリンクはルターによる改革以来の農民戦争と宗教紛争を指してこのebenda, Bl. 34r. 上記註一九を見よ。
- (30) Ebenda, Bl. 32v.
- (31) Ebenda, Bl. 120v. 黙示録二〇六を参照。‘Chiasmus subtilis’はその好概念‘Chiasmus crassus’の対義語は、以下を見よ。Günther List, *Chilastische Utopie und radikale Reformation. Die Erneuerung der Idee vom tausendjährigen Reich im 16. Jahrhundert*, München, 1973, p. 11, n. 6. 参照。Siegfried Wollgast, *Chiliasmus und soziale Utopie im Paracelsismus*, in Peter Dilg and Hartmut Rudolph (eds.), *Neue Beiträge zur Paracelsus-Forschung*, Stuttgart, 1995, pp. 111-139, esp. pp. 120-122（‘Chiasmus subtilis’ bei Paracelsus）.
- (32) Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 155r.
- (33) Ebenda, Bl. 151v -152r.
- (34) Ebenda, Bl. 188v. パラケルススの終末論にならなは、「黄金時代」（“Guldene Welt”）は「エリブの術の時代」（“zeit der Kunst Heilas”）と見なされ、そこには旧約聖書の預言者エリブEliasが、あらゆる未解決の問題を解明しそれにより学問の完成をもたらすために、再び地に現れると云ふ。以下を見よ。Paracelsus, *Von den natürlichen Dingen*: “Dann es ist nicht minder/ viel Kunst sind vns verhalten/ darumb/ das wir Gott nicht gefellig seindt/ dieselbigen vns zu eröffnen. Nuhn aber Eisen in Kupffer zu machen/ ist nicht so viel/ als Eisen in Goldt zu machen: Darumb/ das weniger lest Gott offenbar

werden/ das mehrer ist noch verborgen/ biß auff die zeit der Künst Helias, so er kommen wirdt. Dann die Künst haben gleich so wol Heliam, als sonst zuvestohn ist“ (ed.) Huser, Tl. 7, p. 198).

(35) Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 182v.

(36) Ebenda, Bl. 177v.

(37) Ebenda, Bl. 175v.

(38) 以下を参照。Paracelsus, *Opus Paramirum*: “Drey sind der Substantz/ die do einem jedlichen sein Corpus geben: Das ist/ Ein jedlich Corpus/ steht in dreyen dingen. Die Namen dieser dreyen dingen sind also/ Sulphur, Mercurius, Sal” (ed.) Huser, Tl. 1, p. 73); ders. *De renovatione et Resaturatione*, ebenda, Tl. 6, p. 101. 三原質説のごとくは以下の解説を見よ。CP Bd. 1, pp. 278, 279, 347.

(39) Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 175v-176r.

(40) Ebenda, Bl. 176r.

(41) Ebenda, Bl. 178r.

(42) Ebenda, Bl. 178r-v.

(43) リンクの主張は、創造神学にも基づいたパラケルス主義者たちの正当化議論のバリエーションとして見なされるべきであり、それはスロラ主義的一文獻学的な書物的知識 Bücherwissen とは異なる経験的な自然錬金術的な自然研究を求める議論である。例えばパラケルス主義者アマム・フォン・ポーテンシュタイン (Adam von Bodenstein (1562)) を見よ。 “Quia omnia creator, coelum, elementa et vniuersa, quae ex ipsis nascuntur in vsus hominis fecit, vultque nos ea inquirere ac vi ad hominum

vtilitatem ipsiusque immensam gloriam: Quamobrem firmamentum siue coelum vniuersa inferiora mouens diligenter considerandum [...]” (Widmungsvorrede in: Paracelsus, *De gradibus*, (ed.) Adam von Bodenstein, Mülhausen, 1562, p. *3*, Kommentierte Edition und deutsche Übersetzung in CP2, pp. 153, 161).

(44) 以下を参照。Martin Luther, *Werke. Kritische Gesamtausgabe. Tischreden*, Bd. 1: *Tischreden aus der ersten Hälfte der dreißiger Jahre*, Weimar, 1912, Nr. 1149, p. 566: “Ars alchymia est vere illa veterum philosophia naturalis, quae mihi vehementer placet, cum propter alias multas utilitates, [...] tum etiam propter allegoriam, quam habet pulcherrimam, resurreccionem mortuorum in die extremo.”

(45) Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 176v.

(46) Ebenda, Bl. 136r.

(47) 以下を参照。Blaser, *Paracelsus in Basel* (上記註一五), p. 146.

(48) 以下は以下を見よ。zusammenfassend Thomas Kaufmann, “Die deutsche Reformationsforschung seit dem Zweiten Weltkrieg,” *Archiv für Reformationsgeschichte*, 100 (2009), pp. 15-47.

(49) 以下は以下を見よ。Murase, *Paracelsismus und Chludismus* (上記註一), Kap. 2.3.1.

(50) 例えは Oswald Croll, *Basilica Chymica*, Frankfurt a. M., 1609. 影響力のあった「筆頭パラケルス主義者」(Erzparacelsist) クロール (Croll) のごときは以下の序論を見よ。

錬金術と終末論 ムイツのパラケルスス主義者パウル・リンクとその救済史観(村瀬)

Oswald Crollius, *De signaturis internis rerum*, Wilhelm Kuhlmann and Joachim Telle (eds.), Stuttgart, 1996, pp. 1-40; den Artikel (s. v.) in *Killys Literaturlexikon*, 2, Bd. 2, 2008, p. 504-506 (J. Telle); Owen Hannaway, *The Chemists and the Word. The Didactic Origins of Chemistry*, Baltimore, u. a. 1975, pp. 1-72.

- (15) 例として Nikolaus Hunnius, *Christliche Betrachtung Der Neuen Paracelsischen und Weigelianschen Theology*, Wittenberg, 1622. ヴァンニアンリンクの神学書にこのパラケルスス主義者ハンニウス(Hunnius)がこの書にはじめての当該項目を見よ。 *Theologisches Realencyklopädie*, Bd. 15, 1986, pp. 707-709 (T. Mahlmann). 宗教的パラケルスス主義との関係は以下を見よ。 Ernst Wilhelm Kämmerer, *Das Leib-Seele-Geist-Problem bei Paracelsus und einigen Autoren des 17. Jahrhunderts*, Wiesbaden, 1971, pp. 76-79; und die Erläuterungen in CP3, pp. 215-216, 530.
- (16) 例として一七〇〇年頃のフリードリヒ・ブレンクリング(Friedrich Breckling)の急進的敬虔主義のサークル。以下を見よ。 F. Breckling, "Catalogus testium veritatis," in Gottfried Arnold, *Unpartheyische Kirche- und Ketzer-Historie*, Tl. 4, Frankfurt a. M., 1729, Sekt. 3, Num. 18, § 155, p. 1107. 一七世紀末のブレンクリングとバルノルト(Arnold)とこの二人の敬虔主義者との関係は以下を見よ。 Johannes Wallmann, *Der Pietismus*, Göttingen, 2005, pp. 45-47, 151-160.
- (17) Linck, *Von den Dreyen Seculis*, Bl. 155r. リンクは以下を指摘して「*ベニヤは*」リンクの「*Chiliasmus subtilis*」が「唯

一の羊小屋」(ヨハネ福音書一〇・一六)に関するパラケルススの意見を引いていることである。 神学的な予言的な著作においてパラケルススは「ただ一人の「良き羊飼」であるキリストの下での終末における信仰の一致がこの書に述べられている。 例として以下を見よ。 Paracelsus, *Auslegung der Figuren so zu Nürnberg gefunden*: "er [Christus] der Bapst ist [...] Vnd [...] der Bapst nichts anderst ist auff Erden/ dann ein vollkommen Mensch/ der den Schaffem den rechten Weg Christi anzeigt/ [...] Vnter solchem Gewalt [Christi] wirdt der Schaffstall einig sein/ vnd also werden die Schaff alle in Eilnelm Stall sein/ vnd also wird Ein Hirrt sein/ das ist Christus/ [...] wir werden in Ewigkeit Selig vnd fröhlich leben/ vnd all falsche Christen/ falsch Aposteln/ falsch Propheten werden todt sein" (ed.) Huser, Tl. 10App, p. 188). 参照 Kathrin Pfister, "Die Weissagungen des Paracelsus," in *Paracelsus und Salzburg. Vorträge bei den internationalen Kongressen in Salzburg und Badgastein anlässlich des Paracelsus-Jahrs 1993*, Salzburg, 1994, pp. 355-368, esp. p. 355-358.

- (18) リンクはこの点を見よ。 CP1, S. 9; Wallmann, *Der Pietismus* (上記註五二), pp. 28-39; Martin Brecht (ed.), "Der Pietismus vom siebzehnten bis zum frühen achtzehnten Jahrhundert," in *Zusammenarbeit mit Johannes von den Berg u.a.*, Göttingen, 1993, esp. pp. 113-118, 129-30, 205-214.

(聖学院大学人文学部准教授)